



医師



◆◆◆◆◆ しみ・あざ外来について ◆◆◆◆◆

形成外科副部長 加藤 友紀

最近はしみ・あざに対するレーザー治療が広く行われるようになってきました。レーザー治療のよい点は、メスを使わないため傷跡が残りにくいこと、1回の治療時間が短時間で終わることなどがあげられます。では、本当にどんなしみ・あざでも簡単にきれいになるのでしょうか？

答えは「NO」です。

一口にしみ・あざといっても実はいろいろな状態があります。しみと思われていたものが実はホクロや角化症といった皮膚の病変であったり、時に悪性のものであることもあります。そのような皮膚腫瘍はメスを使った手術が望ましいこともあります。また、いわゆる「しみ」にも雀卵斑(そばかす)や肝斑(女性の頬で左右対称に出現するうすいしみで女性ホルモンが関係するといわれている)などには効きにくいものや、レーザー治療を行うことでかえって悪化するものもあります。

あざにも赤あざ(血管腫、毛細血管拡張など)・黒あざ(ホクロなど)・青あざ(異所性蒙古斑、太田母斑など)・茶あざ(扁平母斑など)など様々なあざがあります。それぞれに有効なレーザーの種類が異なり

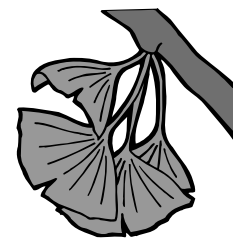
ますが、レーザー治療器は高価な機器であるために、多くの施設では治療できるあざの種類が限定されます。

では当院はどうでしょう？

当院の形成外科では主に青あざ・茶あざに効果の高いレーザーを導入しております。これは同時に比較的大きめの斑点状のしみにも効果があります。いずれの場合も効果があるかどうかの判断をしたうえで、数回～十数回の治療を繰り返す必要があるため、手間と根気が大切です。

特にしみに関しては、単独のレーザー治療機器のみでの治療は効果が少ないことがあることがわかってきていますので、トレチノイン軟膏(ビタミンAの誘導体で海外ではしみ治療薬として使われており、肝斑にも効果が認められることがあります)の外用を併用する治療を開始する予定です。

しみ・あざでお悩みの方は、一度形成外科にご相談下さい。



★「フィリア・レター」は、中部ろうさい」病院が、患者さまに向けて当院の現況や新しい医療情報などを発信したり、患者さまの建設的な意見を反映する広場として発刊しています。